

廣足の石碑を訪ねて

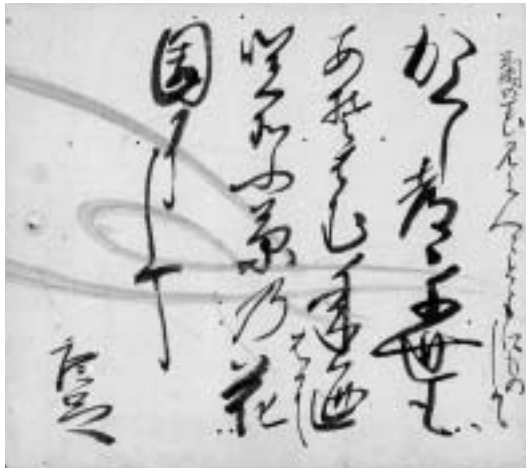
山本 辰雄

長崎駅から山手の方へ五分ほど歩くと『長崎観音』という大きな仏像が建っている寺がある。福濟禪寺です。戦前この寺院は国宝でしたが、同寺所蔵の沈南蘋の名画などとともに原爆で焼失しました。然し庭には蘇鉄とともに焼け残ったものもあります。それは古い石碑であり、再建された本堂の横に今も建っています。碑には「ながさきの町は…」と始まる碑文が書かれていて、最後に「中島廣足」の名がありました。

中島廣足は江戸末期の国学者で、歌人です。歌人とはうたよみ・うたびとも言われ和歌を詠む人のことでありましたが、現代では短歌をよむ人のことです。

大正時代に発刊された『中島廣足全集』（全二冊）に「筒井の碑文」という散文があり、それは此の碑文の全文です。

天保三年、全国的な飢饉がありました。長崎のこの寺のある地域・筑後町も水不足のため、井戸を掘ったのです。その由来と顛末が書かれています。井戸の開削に貢献があった唐通事、林徳成を讃え、町の長・桐山任重が天保六年に井戸の近くに石碑を建てたものようです。だが、



中島廣足・自筆の和歌

いつの頃か其の石碑は福濟寺の庭に移されたようです。あるいは「此の下筑後町は、」と碑文にあることから、初めから福濟寺にあったのかもしれない。

国学者であった廣足は一七九二年に肥後の国（熊本県）に生まれました。国学とは広辞苑によると

古事記・日本書紀・万葉集などの古典の文献学的研究などに基づき、特に儒教や仏教

十里ばかり、路のほとりに近くあり。公私の往来に、馬より下りて跪拜せずといふことなし。…と記し、神功皇后が新羅の国を征討された時に、この両つの石をもって御袖のうちに差し挟んで御心のしづめ（鎮懐）となさった。（記紀には出産を延ばすため、裳の腰につけたと伝える。）このため道行く人がこの石を敬拝すると言われている。

廣足は「平野宿（現在の長崎市平野町）」といえるを過行」と書いた後、弟子の光鎮が語ってくれた事と言って、次のように書いています。

万葉集の五巻の鎮懐石を読んだ歌の序（序文、詞書のようなもの）に彼杵郡、平敷という平敷は、ここなりと言う。この里の長、某が庭に鎮懐石と呼び、祝い据えた赤い石がある。この里の女性が子供を産むときに、その石に願い事をすれば、安産になると言い伝えられている。それなのに先年、ある男がこの里の長を酔わせて、その石を盗んでいき、あまたにわりくだいて、人にやったのを青木大宮司が手に入れたという。某かのしわざはけしからぬと思うけれど、しかし、かの真の鎮懐石は筑前、怡土郡、深江村子負原にあると記してあり、この赤い石は、よしなく思われる。…

廣足がこの紀行文を書いたので、後に鎮懐石の碑が、庄屋であった高谷家の分家の庭であった現在の場所に建てられたものでしょう。越中理事長の話によると、現在の鎮懐石の祠も碑も原爆にあり、高谷重治氏によつて再整備されたということです。

最後に、廣足の長崎での足跡を『長崎の文学』から要約して記します。文政十年から長崎に長期滞在を許された廣足は、「檀園大人」と呼ばれました。この号は、長崎市古町の檀園に住んでいたのにつけたものといわれています。

後年、平田篤胤に「西の国にて古へ学をおこすは廣足を頼みに思うなり」と期待され、また橘守部には「檀園大人、…ことさら歌のお手際秀絶、当今江戸には、かばかりの人、一人もなし」と激賞されました。

廣足の歌風と学風を慕って参集する人々は、一八二〇年から一八三〇年代にかけて飛躍的に数を増しました。廣足の歌壇育成の成果は長崎檀園社中の合同歌集『瓊浦集』にみることが出来ます。歌集は天保十一年（一八四〇年）春に初編二冊が刊行されました。廣足は『檀園集』を著し、更に歌集の他に随筆や紀行文など数多の散文を著し、著作およそ四十六部二百八十八冊といわれています。廣足は安政四年に六十七歳で長崎より大阪へ出ています。（長崎短歌の会）

が渡来する前の日本固有の文化および精神を明らかにしようとする学問であり、古学・皇学ともいう。荷田春満・賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤は四大大人といわれています。

廣足は肥後の細川家に仕え本居宣長に学んだ長瀬真幸について国学を学び、後に江戸に出て越智千里の門に入り和歌文章を学びました。『長崎県人物伝』によると「廣足は博学にして国書を渉り、経史に通じ、語格に精しく、特に和歌文章においては東都村田春海と相並びて雄を称せられる。」とあります。

若くして隠居した廣足はたびたび長崎を訪れましたが、ついには長崎に住みつきました。

文政十一年（一八二八）帰国しようとして船に乗っていますが、台風にあい船が樺島のところで覆り、殆ど死にかけたが運良く長崎に戻ることが出来ました。廣足はこれを『樺島浪風記』として書き残しました。この時の台風こそシーボルト事件の発覚におおいに係わった台風でした。

その後長崎にあること二十余年。古町に居住し、多くの子弟を教えましたが、門人の植木隼太の歌才を愛し、養子としました。植木隼太は後に中島廣行と改名、諏訪神社の宮司となりました。

文政十一年の台風より少し前、廣足は『檀園紀行』という短文を書きました。これは浦上街道を西坂から時津まで歩いた紀行文です。そのなかに『鎮懐石』というのが出てきます。長崎大学医学部の正門前には今も鎮懐石の碑があります。鎮懐石は万葉集の巻の五に次のように記してあります。

筑前の国怡土郡深江の村、子負の原に（現在福岡県糸島郡二丈町深江の地に子負原神社がある）、海に臨める丘の上に二つの石あり。…ともにまる（楕円）く、かたちとりのこ（鶏子）のごとし。そのうるわしきこと、あ（勝）げて…また或いは「この二つの石は肥前の国彼杵の郡平敷の石なり、占いに当たりて取る」といふ。「深江の駅家を去ること二

風信

○長崎の人は「クンチがすむと、もう一年が終ったような気がする」と言う。特に、七年に一度まわってくる「踊り町」の人達は其の感を深くすると話して下さった。

○長崎商工会議所では、東京・京都・福岡で既に実施されている「長崎歴史文化観光検定」資格者試験を三月五日（日）実施する由通知あり。其の試験問題作成委員会より本会にも其の試験作成について協力要請があった。観光も今までのような単なる遊びではなく、他都市同様「文化として捉えた観光文化を学ぶ時代」が本県でも実行されることになったのであろう。

○先日、金沢星稜大学の森山誠一先生が突然たずねてこられた。光源寺に「加州之臣近藤岩五郎の墓は今でも有りましようか」と言うお問い合わせであった。私は光源寺には「加州之臣山田外男」の墓と二つある事を申し上げた。森山先生は一冊の本を持ち出された。それは石川県図書館協会出版の「郷土シリーズ・世相史話」であった。読ませて戴くと慶応二年九月十五日九ツ半（一八六六年）長崎大村町藤屋直三郎方でおきた事件の事であった。其の前年より加賀藩士近藤他四名は勉学のため長崎にきていたが、薩摩藩士との間に事件があり近藤は其の責を一身におい、武士の作法通り藤屋の離れで見事割腹した事が記してあった。近藤の遺骸は翌十六日長崎光源寺に葬す事あり。加賀藩では近藤の誠忠を賞し父近藤信行に百石加増した事も記してあった。

○本会の陸門良輔氏夫妻、熊野古道より高野山を廻り無事帰崎でございましたと報告あり、その記念にハタ烏染ぬき熊野本宮印のある記品を本会に届けられた。

○多年・長崎学を考究されてこられた越中理事長、長崎純心大学博物館より「長崎学の人々」を発刊された。内容は昭和二十三年以来、氏が県内各地を廻り、諸先輩に指導をうけられた事が綴られている。一般には販売されていないので御希望の人は「純心大」または本会事務局上田まで連絡下さい。

